

着る人がハッピーになって ウキウキしてくるような布を織りたい

染織家
吉田美保子さん

「織りは人類の誕生とともに始められ、世界中いろいろな織物があります。やっている作業は今もほとんどかわりません。大切な家族を守りたいと願いながら、その想いを織つてきました。私も、今でも変わらないと思います。私は依頼を受けて布

工房をお訪ねしました。自宅を兼ねた工房には、大きな織機が2台、その他に何台もの糸巻き機類が置かれ、天井からは染めあげた糸が干されています。壁面には何十種もの糸や染め織りの材料や道具たちがびっしりと整理され、使い勝手が良さそうに工夫されています。

「その方の想いをよく知ると同時に、洋服はどんな好みか、似合う色、似合わない色、趣味など細かくやり取りします。お会いする場合もあれば、お写真を送つていただく場合もあります。時には関連する本を読んだり調べたり、いろいろな形でイメージ創りをします。例えば、

織り出す布は、織細でやさしい色合いと、斬新とも思える柄ゆきで、独特な美しさを醸し出しています。その美しい布が他の布と違う点は、その多くが織る前から着る人がわかっていること。着る人の想いと吉田さんの想いを重ね合わせて、織った布なのです。そんな布を紡ぎ出す吉田さんの工房をお訪ねしました。

**仕上がりを思い描きながら試しに織つてみる
その時が楽しい**

吉田さんが一番時間をかけるのが、イメージを決めて設計図にするまでの段階です。依頼された方と手紙やメールのやり取りで、すり合わせていますが、中には2年越しのものもあるとか。

「その方の想いをよく知ると同時に、洋服はどんな好みか、似合う色、似合わない色、趣味など細かくやり取りします。お会いする場合もあれば、お写真を送つていただく場合もあります。時には関連する本を読んだり調べたり、いろいろな形でイメージ創りをします。例えば、

昔の女性が家族に似合うよう想いを込めてトノトノと機を織つたように、吉田さんも着る人の想いを込めてトノトノと機を織つていきます。

**着る人への想いを込めて
トントンと織つていく**

染織家 吉田美保子さんの

を織ることが多いので、着てくださる方がわかつていますから、その方のイメージに合わせて織ります。どんなに良い織物でも、似合わなかったり、着る方が喜ばなければ本末転倒になってしまいます」



ご要望があればそれも合わせて綿密に計算します。ここまでは大変で、設計図ができるまでが大変で、設計図ができると、あとはひたすら織るだけ。体力を使えばいい」とです

楽しいのは、本織りの前に行う試し織りの時だといいます。「試し織りでは、いろいろな可能性を探りながら織つていいますから楽しいです。ただ、

本織りでは全部の要素を入れるとうるさくなつて收拾が付かなくなるので、削ぎ落とす作業がなかなか大変です。実際に着る時は帯や帯揚げ、帯のバランスを見ます。とくに

顔に近い衿やオクミには気を使います。どの色、どんな柄をもつてくるかをよく考え、



それがきれいだから。値段は高いけど、確かにいねいに作つてあるものが多いです。きれいな作品を創るためにあらゆる可能性を探りながら、糸を染め、模様を織り込み、イメージ通りの布地に仕上げていく。固定概念に囚われず、「きれい」を優先するのが吉田流です。

「きれいな色を得るためにあらゆる可能性を探る」と意味ありませんから」

「最終にお召し物として出来上がり、その方が着て輝いているのを見れば安心しますが、布の段階ではこれでいいのかなって、いつもドキドキです。私の仕事は染めて織つて布地を創るところまでで、その後、仕立ててコディネートして完成するのは着る人。

「私の場合、微妙な色の差がある糸をたくさん使ってヨコ糸に織り込みながら濃淡を出していくます。ですから仕上がりのイメージの色に合わせて植物染料でバリエーションが足りないと思えば、化学染料の力を借りて、求める美しい色を得ます。絹糸は国産のものを使うことが多いのは、

く上の軸にしたいということは、昔からずっと思つていて、それは何だろうといろいろなことをかじつてきました。そんな時、たまたま出会ったのが布の染織で、初めはこれが生の仕事になるとは思つていませんでした

「モノを創ることを生きていける人がいます。お客様が美しいと思つて、私が美しいと思うもの、それが重なった時、私の作品となります。『その人のために染めて織る』世界にひとつしかない織物だから、織り手にも着る方にも『大切なもの』なのです」

「着る人は現代の人で、フレンチレストランに着て行くかもしれないし、音楽会に着て行くかもれない。だから和

しある人がイメージを広げて楽しんでいただければ最高ですね。私の作品をまとつた人が『素敵な着物の人』と言われば、すごく嬉しいです」

世界にひとつの大切なもの 染めて織る



現在制作中の帯の試し織りやデザイン画。これでいろいろな可能性を探る。



微妙な色の差の糸をたくさん使用して美しい布になる。

profile
よしだみほこ

1968年熊本県出身。1988年美術大学中退後、2年間ヨーロッパを放浪。さまざまな物づくりに挑戦した後、染・織に出合う。アート 音楽、文学、哲学などを好み、詩的で絵画的な独自の作風を創り出している。

2009年銀座もとし第1回個展「Spring」
2010年銀座もとし第2回個展「中世の秋」
2010年銀座もとし30周年記念作品展
毎年12月に「熊本ゆかりの染織家展」(熊本市の和の國)

★吉田さんが創る作品(着物地や帯地)には、作品ができるまでの交流を通して一緒に創りあげたこと それを着る人への想いなどを綴った手紙が付いており 温もりが伝わってくる。

★染織家としての日々を綴るブログも人気。
<http://someori.cocolog-nifty.com/>
工房 ノメオリヨシダ someori@nifty.com

このことばに吉田さんの創作の原点が表れているようです。